

今月の谷口雅春先生のお言葉

## 親の心の持ち方で子供の成績も良くなる

「勉強しろ」と口癖くちくせのように言う親の誤り

多くの子供たちは、親がまちがった心の波を起こし、まちがった言葉の波を起こしているために非常に損そとわれているのであります。多くの人たちは、子供を愛するあまりに悪あしきことばかりを見つけて、「お前はここがわるいのだ」ということを始終しじゅう言うのであります。そう言われるとその子供は萎縮いしよくしてしまいます。そういう子供は、たとい勉強は辛かろうじてよくできたにしましても、大いに伸びるということとはできないのであります。「勉強

しろ、勉強しろ」と言わなければ勉強しないから、やむをえず「お前はそんなことではできないから勉強せよ」と言うのだという人があるかもしれないけれども、「勉強せよ、勉強せよ」と口癖くちくせのように言うと、いくら勉強してもかえって心に憶おぼえないのであります。これはまたおかしい現象であります、原理は簡単です。「勉強せよ、勉強せよ」と言うような親は、子供に対してどういう心の態度をとっているかといえますと、「お前はできがわるいのだよ」という考えを懐いだいているのであります。できるに定きまっておれば、「勉強せよ」とは申しません。「できがわるい」と信じているから、「勉強しろ、

勉強しろ」とこう言うのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30卷12～13頁〕

### 親が心で子供をしばってはならない

「うちの子供はできが悪い」と、言葉に出さなくとも、心に念<sup>おも</sup>うだけでも一つの波を起こすことであります。親または教育者が、心の中で、「この子供はできがわるい」という精神波動を起こしまして、その子供をそういう心で見つめているかぎりには、その子供は決して学習がよくできるものではありません。勉強室にいまして、勉強しているような真似<sup>まね</sup>をしておっても、心は親の心で縛<sup>しば</sup>られておりますから、勉強が愉快<sup>ゆかい</sup>でないのであります。そういう場合には、勉強室に坐<sup>すわ</sup>っておりますと、なんとなしに窮屈<sup>きゆうくつ</sup>な、縛<sup>しば</sup>られたような感じがいたしますので、その窮屈な中にいるのではのびのびと生命が生長しませんから、そこでいくら勉強しても深く心に愉快<sup>ゆかい</sup>が刻<sup>き</sup>まれるということがないのであります。そのためにつつかく勉強

強しても能率が上がらないのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30卷13～14頁〕

### いったん憶えたものは忘れない

それから、もう一つ教育の上で必要なのは、人間はいったん憶<sup>おぼ</sup>えたことは忘れるものでないということ。自覚することが必要であります。多くの人たちは自分の頭は物憶えが悪いのだと信じている人がありますが、そういうふうな人はその信念によって、せつかく記憶の罫<sup>びん</sup>の中に一ぱい記憶の内容が這入<sup>はい</sup>っているけれども栓をして出ないようにしているのです。自分の記憶の壺<sup>つぼ</sup>からは決して出ないのだと思って、その思いの栓で蓋<sup>ふた</sup>をしているのです。その邪魔物のその栓を引き抜いてしまったならば、一遍憶<sup>いっぺん</sup>えたことは必ず必要な時にことごとく思い出せるのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30卷26頁〕

## わが子に「人間は神の子」の自覚を

勉強しないといっても、やはり学校で先生に習った時には、本も見、先生の話も聞いているのです。本を見、先生の話もきいているからやはり一度は頭に這入っているのです。ですから、一遍習ったことをいつでも思い出せる状態においたならば、家へ帰っても学習しなければならぬということは必ずしもないのであって、一遍憶えたことを試験の時や入用の時に思い出しさえすれば、それで勉強しなくても百点がとれるということになるのであります。それが、憶い出せない。憶い出せないようにしているものはなんであるかというところ、「人間は忘れっぽいものである」という一つの「まちがいの信念」であります。(中略)「人間は忘れる動物だ」とのまちがいの信念を、いかにして打ち破るかというところ、それには「人間は神の子である、全智全能の神の子であって、全智全能が自分の頭にあるのだから決して忘れるものではない」という大自覚を人類に与えることが必要なのです。(中略)常に子供に対して「あなたは神の子ですよ」と神の子だから必ず頭がよくて記憶力はよいのですよ」ということを教える。「あなたは神の子だから、本を一遍読んだら決して忘れるものではありません。先生から一遍聴いた話はもう決して忘れやしないのですよ。必要な時には必ず思い出せる」ということを常に言葉の力によつて生徒たちの頭に印象するようにするのであります。そうして、試験場または実際問題に臨んだ時に、「人間は神の子である」ということを思い出して「自分は神の子だから、必ず憶い出せるのだ。必ずよい考えが浮かんでくるのだ」と、こう心に唱えて、心を落ちつけて、さて問題に対したならば、必ずそこに出されている問題に対する適当な回答が思い出されてくるのであります。人間の能力を発達せしむるには、そういうふうな子供のときから「我は神の子、無限力」の自覚を与えることが肝要であります。

『生命の實相』頭注版第30巻32～33頁